

信州アルプスシニア合唱祭

Golden Wave in INA

ゴールデンウェーブin伊那 2022



加藤良一

令和4年4月18日

彩の国プラチナ混声合唱団は、春の信州、伊那市で行われた「信州アルプスシニア合唱祭」に出演しました。この大会は、本来NPO法人ゴールデンウェーブが主催する「国際シニア合唱祭ゴールデンウェーブin横浜」という事業です。しかし、今回は後述するような諸般の事情により会場を長野に移し、標記の合唱祭として開催されました。

❖ 信濃の国

伊那市のある長野県南部一帯は、天竜川に沿って南北に伸びる盆地で、伊那盆地や伊那^{いな}平とも呼ばれます。合唱祭の全体演奏では、長野県民で知らぬ人はないといわれるほどの県歌「信濃の国」を歌いました。歌詞は6番までありますが、冒頭を紹介します。

信濃の国は十州に 堺^{さかい}連ねる国にして
 聳^{そび}ゆる山はいや高く 流るる川はいや遠し
 松本伊那佐久善光寺 四つ^{たいら}の平は肥沃の地
 海こそなけれ物さわに 万^{よろ}ず足らわぬ事ぞなき
 ……

「十州」とは、越後国(新潟)、上野国(群馬)、武蔵国(埼玉)、甲斐国(山梨)、駿河国・遠江国(静岡)、三河国(愛知)、美濃国・飛騨国(岐阜)、越中国(富山)の十国と国境を接していることを指します。現在では8県になります。また、「四つの平」とは、



松本平、伊那平、佐久平、善光寺平という肥沃な四つの平地のことで、海こそない山国ではあるものの、なんの不足もない豊かな実り多い土地であるという誇りを表しています。

❖ 彩の国プラチナ混声合唱団の道のり

プラチナ混声は、平成29年(2017)、「第9回国際シニア合唱祭ゴールデンウェーブin横浜」に埼玉から参加するために埼玉県合唱連盟が立ち上げた有志の合唱団です。参加資格は、年齢自称50歳以上、連盟の加盟・非加盟は問いません。初回は、女声97名、男声19名と完全に女声上位の構成でした。その後、毎年参加してきましたが、この男女比はさほど変わっていません。

通常は計6回の練習と、その間、「全日本おかあさんコーラス埼玉大会」のゲスト出演と、「国際シニア合唱祭」出演の2回本番を迎える形で進めています。

令和2年(2020)の第12回大会が新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、それに向けて動き出していたプラチナ混声もやむなく活動停止に追い込まれました。

翌令和3年(2021)には、いつもの会場である横浜みなとみらいホールが改修工事で使用できなくなりましたが、長野県伊那文化会館が代わりに開催すると手を上げてくれ引き継ぐ形となりました。しかし、プラチナ混声では、コロナ禍の演奏旅行は厳しいと断念しました。

そして、迎えた令和4年(2022)の伊那大会参加、練習は1月からスタートしました。まずは3月6日のおかあさんコーラスでのゲスト出演では、ホールの人数制限要請で全員がステージに乗ることはできな



いため、54人の女声陣を半分に分け、チーム①・②とし、男声はそのままどちらにも加わることで2度演奏するという珍しいやり方となりました。この際、男声を中央に置く場合と上手側に寄せる二つのフォーメーションで演奏し、どちらが良いか試みました。結果として、

上手に男声を置くほうが良いということになり、信州ではその布陣でいくことにしました。スケジュールが進むにつれ、コロナ禍の影響や、仕事や病気で脱落するかも出てきましたが、残ったもので頑張るしかありませんでした。

❖ いざ、信州伊那の本番へ

埼玉から伊那へはバスを2台仕立てての1泊旅行となりました。小雨交じりの天気でしたが、途中の道路は順調でした。



信州アルプスシニア合唱祭 ゴールデンウェーブin伊那2022

～ 信州・伊那谷に響き輝く ゴールデンエイジの歌声 ～

- ・2022年4月13日(水)・14日(木)
- ・長野県伊那総合文化会館 大ホール
- ・主催:長野県伊那総合文化会館
- ・共催:長野県/長野県教育委員会/伊那市/伊那市教育委員会
- ・講師:岸信介 古橋富士夫

今回は、コロナ禍で練習もままならないということもあり、直前にキャンセルされた団体もありましたが、全国から15団体が参加しました。遠くは岡山、京都、愛知から遠征してきました。大会進行に余裕があるからでしょうか、各団の演奏終了後、すぐにお二人の講師がそれぞれの座席から口頭で講評するというやり方も他では見られないものでした。

大会期間の長野県は、新型コロナウイルス感染者数が過去最大というタイミングでした。しかし、マスク装着は出演団体の判断に任されており、当然マスクをしない団体もありました。唯一男声合唱曲を歌った「アルプス男声合唱団」はマスクなしで、草野心平作詩、多田武彦作曲、組曲『富士山』から、3曲を歌いました。



❖ 彩の国プラチナ混声合唱団 「未来へ」を演奏

プラチナ混声は、谷川俊太郎作詩、信長貴富作曲<混声合唱曲集『かなしみはあたらしい』より「未来へ」>を歌いました。

指揮:小野瀬照夫(埼玉県合唱連盟理事長)

ピアノ:持田みどり

道ばたのこのスマレが今日咲くまでに
 どれだけの時が必要だったことだろう
 この形この色この香りは計りしれぬ過去から来た

遠く地平へと続くこの道ができるまでに
 どれだけのけものが人々が通ったことだろう
 足元の土に無数の生と死がうもれている

……

道ばたに咲くスマイルという小さな存在、そこには無数に繰り返されてきた生き物の営みが隠れている。足元のスマイルからしだいに遠く彼方の地平へと視点を移したとき、「人は限らないものを知ることはできない」、つまり人は未来を容易に見ることはできない。「だが人はそれを生きることができる」、見えないからこそ勇気をもって「未だ来ないものを人は待ちながら創っていく」、そう、自ら創ってゆくしかない。「何故ならきみが未来だから」と、この詩は語りかけてくる。



スマイルの花言葉は、その色合いによってさまざまありますが、全般には、「謙虚、誠実、小さな幸せ」です。

「未来へ」の楽譜は、音楽の友社にピース譜として特別に依頼したものを使いました。

ギター伴奏が付いていますが、「ギターの音型は必ずしも楽譜通りでなくて構いません。2本以上で弾く場合は、ストロークと分散和音を組み合わせるなど、自由にアレンジしてください。」と断り書きがなされています。プラチナ混声は、当初ギターも付ける予定でしたが、最終的にはギタリストの都合がつかず実現しませんでした。


[Back](#)

「音楽／合唱」TOPへ戻る

[Home](#)

「ホームページ」表紙へ戻る